

トビウオ通信 (H25 第 4 号)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 25 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 25 年 3 月に開催された東シナ海～日本海南西海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容を基に、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 25 年度上半期（4～9 月）の中・長期的な漁模様の予測をします。

山陰沖における漁況(来遊)予報〔平成 25 年上半期(4～9 月)〕

マアジ:前年並み

マサバ:前年並み

カタクチイワシ:前年並み

ウルメイワシ:前年を上回る

マイワシ:好調であった前年並み

※ 本文中で「上半期」は 4～9 月、「下半期」は 10～翌年 3 月、「平年」は過去 5 カ年の平均値をいいます。

マアジは前年並み

東シナ海～日本海南西海域の漁況と今後

東シナ海～日本海南西海域における大中小型まき網によるマアジの漁獲量は、平成 20 年以降増加傾向にありますが、平成 24 年は 2 万 9 千トンと平成 23 年を下回りました（図 1）。沖合域の今後の漁況は前年並みに推移すると予測されています。

一方、鹿児島県から山口県の沿岸域における平成 24 年 11 月～25 年 1 月の漁獲状況は前年・平年を下回りました。直近までの漁獲状況から今後は不調であった前年並みで平年を下回ると予測されています。

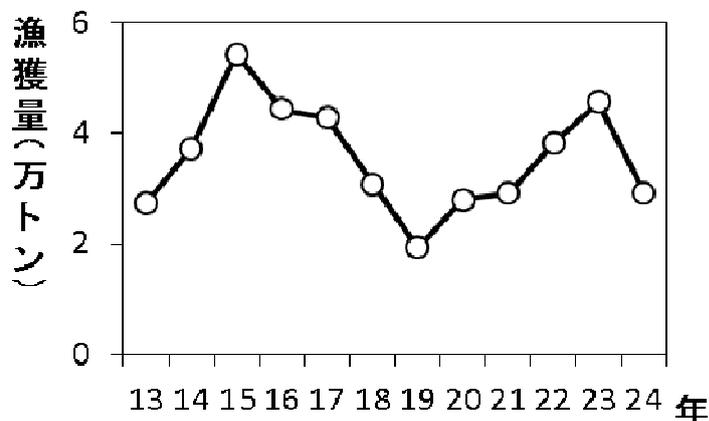


図 1. 東シナ海～日本海南西海域（大中小型まき網）によるマアジ漁獲量の推移

山陰沖の漁況と今後 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 13 年度以降、2～3 万トンで横ばい傾向にあります（図 2）。平成 24 年度下半期は 10,254 トンの漁獲があり、前年同期（19,658 トン）の 52%、平年同期（12,441 トン）の 82%でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる 1 歳魚（大き さ 15～20 cm : H24 年生まれ）と 2 歳魚（大き さ 20～25 cm : H23 年生まれ）の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる 0 歳魚（大き さ 5～15 cm : H25 年生まれ）の加入状況によつて決まります。1・2 歳魚の来遊状況は、山陰沖の海水温の分布状況の影響を大きく受けます。昨年の春季の水温は H23 年より高めに推移しましたが、隠岐西方に冷水塊が張り出しており、その影響を受けたためか上半期の漁獲量は前年並みとなりました。また、0 歳魚の本格的な加入が 10 月からと遅く、H24 年度新規加入量調査でも低い加入量指数を示していた（図 3）ことから下半期の漁獲量は前年を下回りました。今期の山陰沖を含む日本海西部海域の 50m 深水温の推移はまだ予報が出ていないため予測が難しいですが、平成 24 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報（H25 年 3 月 22 日発表）では対馬暖流域・沿岸域の水温が前年並み～はなはだ低めと予測されていることから山陰沖もそれに準ずると考えられ、また、今期に 1 歳魚となる平成 24 年生まれの加入状況は、直近までの漁獲状況とマアジ新規加入量調査※の結果から前年並みになると予測されます。これから山陰沖に加入してくる 0 歳魚の状況は今後調査予定ですが、前年並みとすれば、全体の来遊量は前年並みになると予測されます。

※マアジ新規加入量調査：山陰沖へのマアジ 0 歳魚の加入量を早期に把握するための調査です。加入量指数が高いとマアジ幼魚の豊度が高いことを表します。詳しくはトビウオ通信 H24 年第 5 号 http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/suisan/shinkou/umi_sakana/tobiuo/index.data/2012no5.pdf をご覧ください。

マサバは前年並み

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、平成 19 年から上向き傾向にありましたが、平成 22 年から減少し、現在は平成 13～18 年並みの水準に戻っています（図 4）。平成 24 年の漁獲量は 4 万 4 千トンで前年・前年並みとなりました。

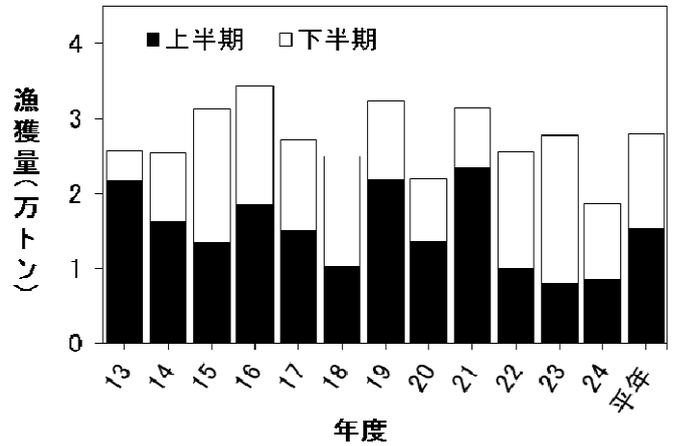


図 2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（平年は H19～23 年の平均値）

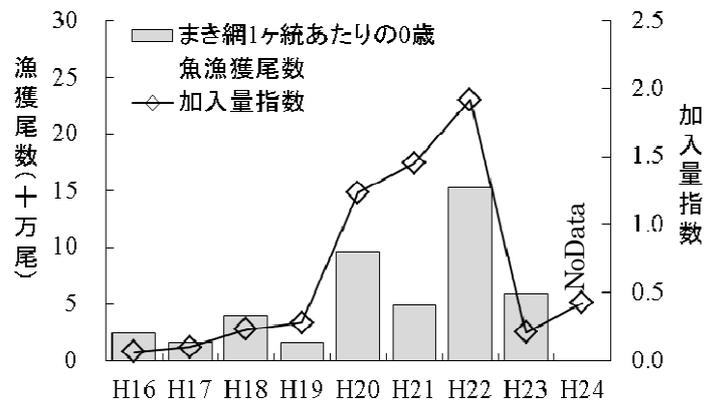


図 3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と 6～12 月におけるまき網（境港）1 ヶ統あたりの 0 歳魚の漁獲尾数（H24 年は未集計）

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、主漁期にあたる下半期の経年変化をみると、5千～2万トンの中で増減を繰り返して推移しています（図5）。平成24年度下半期の漁獲量は11,310トンで、前年同期（13,712トン）の82%、平年同期（12,455トン）の91%となり、前年・平年並みの漁況でした。

今期は盛漁期にはあたらないため、今後漁獲は低調に推移しますが、1歳魚（25～30cm：H24年生まれ）が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚（15～20cm：H25年生まれ）も漁獲されます。1歳魚の資源水準は前年並みか前年を上回るとされています。また、0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因（海水温が低水温傾向ではあるが昨年より高い）からみると前年並みか前年を下回ると予想されています。従って、全体の来遊量は前年並みと考えられます。

カタクチイワシは前年並み

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成13年度以降増減を繰り返して推移しています（図6）。平成24年度下半期の漁獲量は4,472トンと、前年同期（2,698トン）の166%、平年同期（5,117トン）の87%でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚（大きさ5～10cm：H25年生まれ）と1歳魚以上（大きさ12～14cm：H24年以前生まれ）の来遊量で決まります。H20年生まれ以降のカタクチイワシは同程度の資源水準にあると推測されています。また、H25年生まれは、産卵親魚の漁獲状況から前年並みと判断されます。近年の山陰沖では本種は3～5月にまとまって漁獲される傾向が強く、今年2～3月の漁獲は低調であった前

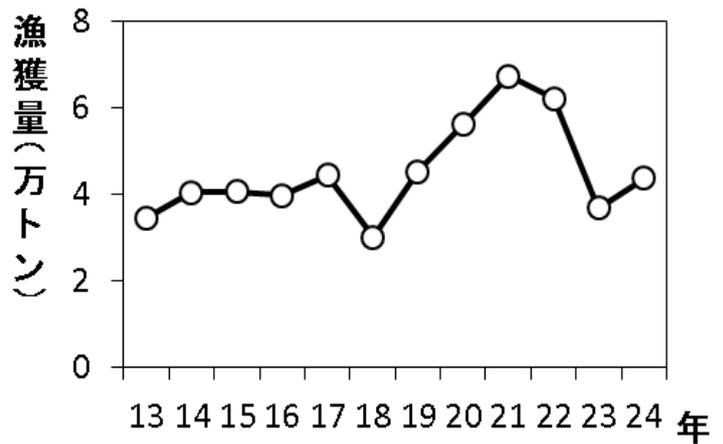


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

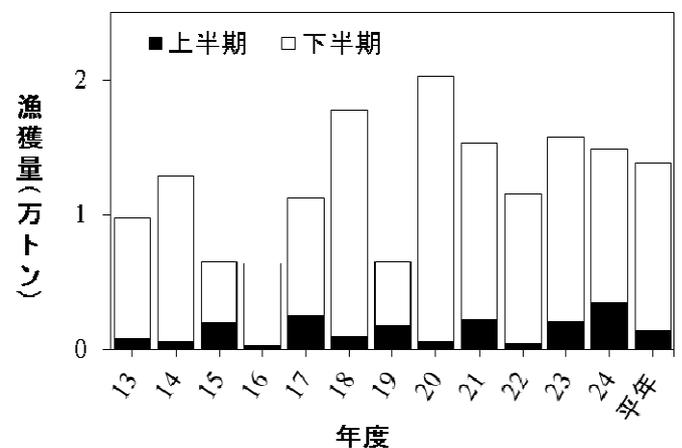


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（平年はH19～23年の平均値）

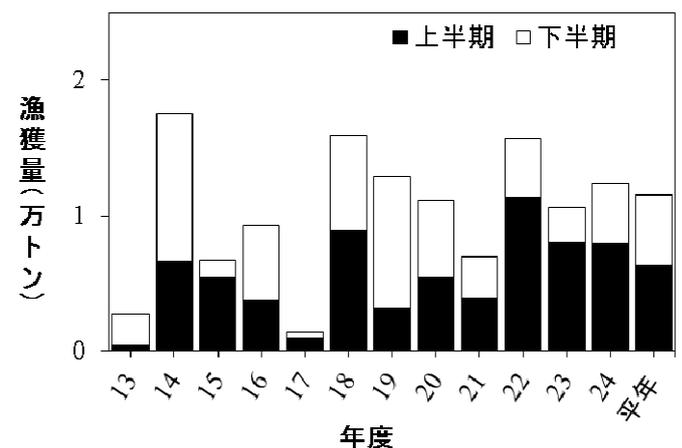


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（平年はH19～23年の平均値）

年と異なり好調であるものの、5月以降は近年の傾向通り漁獲量が減少すると考えられるため、結果として全体の来遊量は前年並みになると予測されます。

ウルメイワシは前年を上回る

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成14年度以降はやや増加傾向にあり、特に平成23年度は過去10年間で最高の漁獲量を記録しました(図7)。平成24年度下半期の漁獲量は5,025トンと前年同期(15,025トン)の33%、平年同期(5,718トン)の88%でした。

今後は、1~2歳魚(大きさ18cm以上：H24年~H23年生まれ)と夏以降の漁獲に加わる0歳魚(大きさ5~15cm：H25年生まれ)が漁獲の主体となります。平成11年以降の春季と夏季(4~8月)の合計漁獲量と前年の産卵親魚量の間をみると、両者には正の相関があります。平成24年の推定産卵親魚量から今期の来遊量を予測すると、前年を上回ると予測されます。

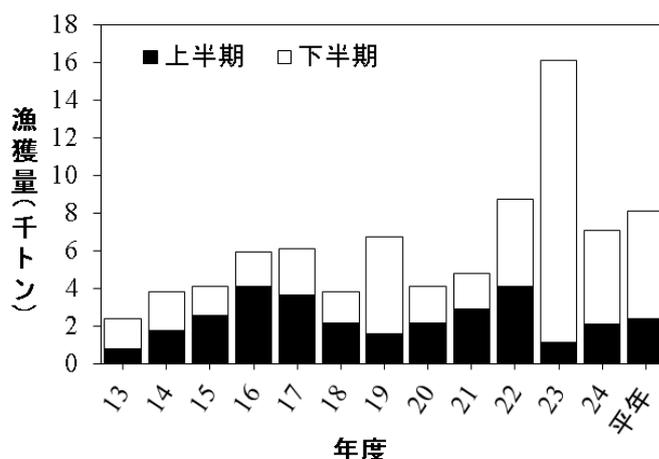


図7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移(平年はH19~23年の平均値)

マイワシは好調であった前年並み

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は平成15年以降回復傾向にあり(図8)、平成24年は前年に引き続いて豊漁となりました。平成24年度下半期の漁獲量は9,120トンと前年同期(2,935トン)の311%、平年同期(1,664トン)の548%と好調でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる1~2歳魚(大きさ15~20cm：H24年~H23年生まれ)と夏以降の0歳魚(大きさ15cm以下：H25年生まれ)の来遊量で決まります。平成23年生まれ(2歳魚)と平成24年生まれ(1歳魚)は、直近までの漁獲状況等から前年と同程度の資源水準であると考えられています。また、予測が困難な0歳魚を前年と同程度と仮定すると、今期の来遊量は好調であった前年と同程度と考えられます。マイワシ全体の資源量は、昭和50年代~平成初期にみられた豊漁にはまだ及びませんが近年増加傾向にあるため、今後の動向を注視する必要があります。

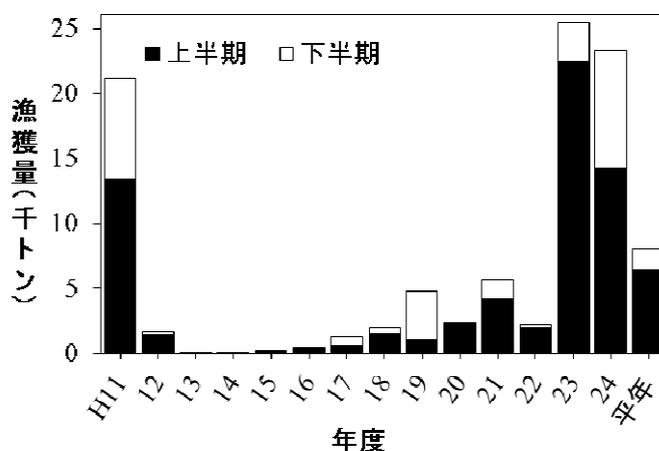


図8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移(平年はH19~23年の平均値)